

20 email t-hatsu@tokyo-np.co.jp

T発

蛇口をひねれば水が出る。そんな暮らしが当たり前の現代の東京でも、実は多くの井戸が残されている。関東大震災や東京大空襲では多くの命を救い、いまも人々の生活を支え続ける井戸。その魅力に取りつかれ、都内各所を探し歩く人がいる。



池之端の住宅街にある井戸で水を出して遊ぶ子どもたち

路地裏歩き「発見」60カ所

井戸の

風景



東日暮里の駐車場に最近設置された井戸。水の大切さを訴える標語があった

「宝探しの感覚ですね。見つけるとうれしくて」
薄い木漏れ日が入る谷中の細い路地を歩く。会社員の柏崎哲生さん(35)に案内されたのは「野田家専用」の表札が掛かる屋根付き井戸だった。

「(近くの)上野高校に自転車通学したのに、路地の奥は知らなくて」。四年半前、谷中観光の一般ルートから外れたコースに迷い込み発見した。レトロな風景に、一目見て「お宝」と思った。各地の井戸を写真で紹介するサイトを始めた。

「野田家専用」の井戸の持ち主の野田昭二さん(80)とは、この日、初めて対面した。明治時代に「祖父が掘ったもの」というから、百年以上の歴史を刻む。
「お茶の先生が最近まで、自転車でポリタンクを載せて来てました。検査もしますから飲めますよ」。柏崎さんは一口飲んで「軽さ? うーん、まろやかさ? おいしい!」。

谷中は空襲には遭わなかった

が、都市化のおおりで井戸が枯れそうになったこともあった。「地下鉄千代田線と都の下水道工事の際は一時、水が出なくなると」と野田さんは振り返る。大掛かりな井戸さらえで危機を乗り越えた。

夏場、近所の東京芸術大学の学生がやってきた。「足をつけて、気持ちいいって」。世代を超えた「井戸端会議」に花が咲く。

池之端にも、狭い路地をふさぐように共同井戸があった。池之端四丁目町会長の笹目浩生さん(65)は「通行人がぶつかると、(ポンプの)木の柄が折れることもあってねえ」と話す。修理費用は近所六軒で分担して



谷中で100年続く井戸を守る野田昭二さん(右)と都内の井戸巡りを続ける柏崎哲生さん

23区でも暮らし潤す

いる。「植木の水やりがまだけど、料理に使う人もいますよ。終戦直後はスイカやビールを冷やしていた」

二十三区の飲用井戸の総数は、都の調査でもはつきり分らないが、柏崎さんは、使われていないものも含め「六百以上発見した」という。二十三区全体なら一万〜二万はあると推測し「路地裏を歩けば、どこでも見つかる」と話す。

四谷や神楽坂、板橋や十条周辺、佃島や品川などに多い。雑司が谷では生花店で利用されているという。

東日本大震災で、防災面から井戸に再び注目が集まっている。阪神大震災翌年の一九九六年から公園、小中学校などに井戸整備を始めた荒川区には、現在三十八カ所の防災井戸がある。区防災課は「飲用不可だが、トイレや初期消火に活用したい」という。世田谷区や東京消防庁も、井戸の増設を打ち出している。

都会の井戸に触れ、子どものころ群馬県の親戚宅で見た懐かしい記憶がよみがえったという柏崎さんは、サイトで昔ながらの「井戸のある風景」の情報提供を呼び掛けている。

「井戸の周りには、思いやりや、人とのつながりを大切にしている街がある。井戸からは、今の日本が取り戻さなくてはならないものが浮かんでくるのです」。サイト名は「井戸人」。

文・滝沢学
写真・中嶋大
紙面構成・青木孝行